

母性看護学実習における 学生の学びと実習目標との関連性

井田 歩美¹⁾・斉藤 早苗²⁾

抄 録

本研究では、学生の母性看護学実習（以下、母性実習）での学びと実習目標との関連性について明らかにする。対象はA大学4年次生で母性実習を終了した学生79名とし、実習終了後に学生が自由記載した学びのレポートを文脈で区切り、意味内容の類似性・関係性を考慮し、カテゴリー化した。結果、206コードが抽出され、学生の母性実習での学びとして16カテゴリーが抽出された。そのうち13カテゴリーは到達目標と一致しており、【生命の誕生と家族】、【褥婦、新生児の看護】、【母性看護の特徴】が上位3つを占めていた。実習目標とは別に【ウェルネス志向】の理解や【学習姿勢】、【男子学生の母性実習の意義】が抽出された。結論として、母性実習の学びとして自由記載した内容は実習目標との一致がみられ、それ以外での学びでは母性実習で学んで欲しい内容や学生としてのあり方を見つめなおす機会、さらに男子学生が自らの母性実習の意義として見だしたものが表出されていた。

キーワード：母性看護学実習 /practice in motherhood nursing・学び /learning・到達目標 /goal

I. 諸 言

母性看護学は、妊産褥婦および新生児への看護活動に加え、次世代の健全育成を旨とし、母性の一生を通じた健康の維持・増進、疾病予防を目的としている¹⁾。看護基礎教育における母性看護学実習（以下、母性実習とする）は、時間的な制約のなか効果的に母性看護学を学ぶ機会となるよう女性の一生のなかで最も変化の大きい妊娠・分娩・育児期の援助に焦点をあて学習する。

A大学における母性実習は3カ所の実習病院に分かれ、2単位90時間を4年次前期に開講している。

今回、学生が母性実習での学びとして自由記載した内容と実習目標との関連性を分析し、今後の母性実習における教育方法について考察した。

II. 研究方法

1. 対 象

A大学4年次生で2009年5～7月に母性実習を終了した学生79名。うち女性64名、男性15名。

2. 方 法

母性実習終了後に、学生が自由記載した母性実習での

学び・感想のレポート内容から文脈を抽出した。その後、母性実習の目的、目標に含まれる語句に沿って意味内容の類似性・関係性を考慮し、カテゴリー化した。

3. 倫理的配慮

学生には全ての実習が終了し成績・単位、そして卒業認定が確定した時点で、研究の趣旨を紙面および口頭で説明した。学生への研究協力依頼文には、非協力でも不利益を被らないこと、データは無記名で統計処理を行うため個人の特定はなされないこと、結果は研究のみに活用し、適正に管理することを記載した。

4. A大学における母性看護学実習

1) 母性看護学実習の目的・目標

【目的】妊婦、産婦、褥婦および新生児の特徴を理解し、対象（母と子とその家族）に応じた看護を実践するために必要な基礎的能力を養う。

【目標】

- (1)妊娠・分娩・産褥期および新生児期における対象の身体的、心理的、社会的な変化を理解する。
- (2)妊娠・分娩・産褥期および新生児期における対象の健康問題を明確にし、対象に必要な看護を理解する。
- (3)対象が活用できる社会資源を理解する。
- (4)対象を取り巻く保健医療チームにおける看護職者

1) Ayumi IDA

関西福祉大学 看護学部

2) Sanae SAITOU

梅花女子大学 看護学部

の役割を理解する。

(5)妊娠・分娩・産褥期および新生児期の看護における倫理的配慮を理解する。

(6)学生自身の母性に関する意識や看護観を涵養する。

2) 母性実習病院：3病院で、年間取扱い分娩件数は A 病院 400 件、B 病院 700 件、C 病院 900 件

3) 母性実習方法：4～6名が1グループとなり、いずれかの病院で2週間の実習を行う。そのうち1週は産後の母子を受け持ち、褥婦と新生児の看護過程を展開する。他の1週はその日の状況に応じ分娩期の看護や妊婦健康診査時の看護を学ぶ実習としている。

4) 指導体制：病院ごとに1名の教員が担当し、実習指導を行う。

Ⅲ. 結果

分析の結果、206のコードが抽出され、学生の母性実習における学びとして16のカテゴリーが抽出された。そのうち13のカテゴリーは母性実習目標と一致しており、母性実習目標以外のものでは【ウエルネス志向】、【学生としてのあり方】、【男子学生の母性実習の意義】のカテゴリーが抽出された(表1)。

表1 学生の学びの内容)

カテゴリー名	コード数 (%)
生命の誕生と家族	51 (24.8)
褥婦、新生児の看護	35 (17.0)
母性看護の特徴	15 (7.3)
看護職者の役割	13 (6.3)
家族への看護	10 (4.9)
社会資源の活用	7 (3.4)
妊婦の看護	7 (3.4)
褥婦、新生児の変化	6 (2.9)
産婦の変化	4 (1.9)
母性観、看護観の涵養	4 (1.9)
妊婦の変化	2 (1.0)
産婦の看護	2 (1.0)
倫理的配慮	1 (0.5)
ウエルネス志向	25 (12.1)
学習姿勢	15 (7.3)
男子学生の母性実習の意義	3 (1.5)
その他	6 (2.9)
合計	206 (100.0)

1) 母性実習目標に一致した内容

(1)【生命の誕生と家族】

このカテゴリーは学生の学びの中で最も多く51コード24.8%を占めていた。内容としては、「分娩に立ち会い、あれだけ痛く苦痛であっても、新生児を娩出すると喜びに満ちた顔で夫と共に笑っておられる姿をみると嬉しい気持ちになった。表情がパツと明るくなったとき、生まれて初めての感動だけでは片づけられないような感情を抱くことができた。」といった分娩に立ち会うことで生命誕生に対し素直に湧き起こる思いが多く表出されていた。同時にその感動は、「お産に立ち会い本当に感動した。お父さんの涙やお母さんの頑張りをみて、私もこういう風に生まれてきたんだと思って嬉しくなったし、自分も絶対に子どもを産みたいと思った。」というように、両親への感謝や自分も将来子どもを持ちたいという願望へとつながっていた。さらに両親に対する感謝だけでなく、「皆から祝福される出産というライフイベントに学生という形で参加させていただいたこの貴重な体験を大切にしたいと考える。」といった実習生という立場でその場に立ち会えたこと自体への感謝も表出されていた。また、「実際に分娩を見たり、新生児に触れたり、褥婦と関わったり、切迫早産の方のお話を聞いたり、多くのかげがえのない生命の誕生、その在り方について深く考えさせられた。」と、分娩に立ち会うこと以外での母子との関わりからも、【生命の誕生と家族】について考えることができていた。さらに、「新しい生命が誕生し喜びであふれている場所であるが、その一方で流産や死産といった悲しいことが起こることもあり、ある意味で生と死が隣合わせにあり複雑な場所であると感じた。」というように、母性看護の場が決して喜びの場だけではないと学べた学生もいた。

(2)【褥婦、新生児の看護】

このカテゴリーは35コードが抽出され全体の17.0%を占めていた。内容は、「母性看護は母児を共に見ている必要があり、母親の状態が児に影響する。児の状態が母親の状態に影響するなど相互作用があるため、それを理解し実施していけたのではないかと思った。」というように母性看護の対象は母子双方であり、母子相互作用について理解できていた。そして、「退院後赤ちゃんが家族がどうすればうまくいくのかを一緒に考えて、退院後の生活を見据えたうえで5日間看護をしていかなければならないと思った。」というように短い入院期間の中で退院後の生活を見据えた看護を実施することの必要性

も表出されていた。さらに、「健康教育（保健指導）では、対象者が自身で実施していけるように関わりをもつことが大切であると感じた。そのためには対象者は今何を必要としており、どこまでできているのかなどアセスメントやその人の能力を見極める必要があると感じた。」といった母性看護の中心は健康教育（保健指導）であることを理解していた。また、「コミュニケーション方法として、マッサージしながらなどケアを通してコミュニケーションをとることで、お互いに話しやすくなり、会話ができた。ケアを通してかかわる大切さも学んだ。」、「退院して6か月母乳をあげることを5日間で習得すお母さんの大変さをくみ取り頑張っていることを褒め、お母さんになることはすごいことなんですよと伝えて頑張りを認めなければならない。」というように褥婦との具体的な関わり方を学べており、それは「褥婦さんからの不安に対し、丁寧に正確に応えるスタッフをみて、優しさや明るさ、自信を持って接すれば、対象者は安心を抱けたり、自信を持って育児に臨めるようになり、自己効力感を高めるきっかけになるだろうと思った。」というように臨床スタッフの実際の姿を見ることにより理論を用いての学びを表現していた。

(3) 【母性看護の特徴】

このカテゴリーは15コードが抽出され全体の7.3%を占めていた。内容は、「母性看護は妊娠期、分娩期、産褥期と幅広い情報、対象の理解が必要で、いつ入院してくるかわからない状況のなかで看護していかなければならないので、早い展開が求められると学んだ。」というように母性看護は展開が早く予測的な行動が必要であることや、「実習での関わりをとして周産期における身体、心理、社会的特徴を知ることができ、また周産期における看護の流れは一定であることが多いがひとりひとり抱える不安や健康課題はちがって個性があることを知ることができた。」といった個性の重要性を理解したものだ。さらに、「妊娠、出産、育児はその人とその人を取り巻く家族にとって重要な出来事であり、満足いく出産、育児ができることは満足いく人生につながる。」というように妊娠・出産・育児を女性の一生の一大イベントととらえ対象の満足さへの支援の必要性を理解できていた。

2) 母性実習目標以外の内容

(1) ウェルネス志向】

このカテゴリーは25コードが抽出され全体の12.1%

を占めていた。内容は、「母性看護学では、妊産褥婦や新生児をみていると、他の領域と異なり順調な経過をたどっていき何の問題点もみつからないということがあがるが、そう考えるのではなく、その人が今後どのような経過をたどっていくことが望ましいのかを考えて、現在の良い状態を維持したり、またさらに良い方向へ向かうように支援していくというウェルネスの視点でみていくことも必要であると学ぶことができた。」や、「対象者は病気ではない健康レベルの高い人であるため、看護師がその人の持っている力をどんどん引き出していくことによって対象者は変化していくのだと感じた。」といった【ウェルネス志向】で対象を捉える母性看護の特徴が理解できたことを表出していた。

(2) 【学習姿勢】

このカテゴリーは15コードが抽出され全体の7.3%を占めていた。内容は、「興味のある分野だったが、事前学習が足りておらず、質問にスムーズにこたえられなかったり観察項目が不足していた。」、「展開が早く、知識がなくて考えているうちに経過していつまで経たなかったことが多かった。」といった自己の事前学習不足や知識不足を痛感した学生がみられた。一方で、「必要な知識、エビデンスを資料や文献を活用し実習することや、実習中での課題も調べたり教員に尋ねることで解決することができた。」といった主体的な学習方法を身につけながら実習している様子の方が内容もあつた。その他、「カンファレンスの意味なども考えることができた。」といった【学習姿勢】について考えた内容が表出されていた。

(3) 【男子学生の母性実習の意義】

このカテゴリーは3コードが抽出され全体の1.5%を占めていた。男子学生は、「男子学生が母性実習に行く意義について、どの年代の看護を展開するにおいても、結婚、出産ということは人の一生の中の起点、原点ともいえることで、それに対する命の大切さ、ありがたさを看護職についたときも振り返り、個性、生きがいなどを考えてケアできるようにするためだと思う。」、「“なんで母性行かなあかんねん”って思っていたけど、健康な人への介入として他分野でも活用できる能力を身につけるために必要ことだと感じた。」、「夫へ支援について考えることが、男性看護学生が母性看護実習に行く理由ではないかと考えることができた。」というように母性実習の意義を見出していた。

IV. 考 察

本研究結果より、母性実習終了後に学生が母性実習の学びとして自由記載した内容は、母性実習目標に沿ったものと、それ以外のものに分類することができた。

以下、母性実習目標に沿ったものとそれ以外のもの2つの視点から考察する。

1. 母性実習目標に沿った内容

A 大学の目標の一つには、『学生自身の母性に関する意識や看護観を涵養する』としている。学生が一連の看護過程を学ぶだけでなく、ひとりの人としてまた看護専門職者としてのあり方を考える機会となることも期待している。

少子化により学生が一般的に妊産褥婦および新生児という対象と接する機会は少ない。ましてや分娩の立ち会い経験は看護学を学ぶ学生であるからこそ与えられるものといえる。学生にとって分娩に立ち会えることは、母性実習での学びに大きく影響を及ぼすと考えられる。衣川が、学生は分娩現象のもつリアリティに圧倒されながらも、「産む」「生まれる」ことに深く感動する²⁾と述べているように、学生は独自の言葉で感動を表現していた。また、分娩の痛みを目の当たりにすることで子どもを産み出す母親の偉大さを実感している。そして、母親の偉大さは自分の母親に対する産み育ててくれたことへの感謝へと変化し、さらには人が生まれてくること自体を奇蹟であると捉えるに至っている。一方で、分娩に立ち会えたことだけが命をかけたがえのないものにとらえられる必須条件でないこともわかった。母性実習指導においては、産婦の同意の上臨床スタッフとの調整を図ることで可能な限り学生が分娩に立ち会えるように支援すべきである。しかし、分娩の立ち会いができなかった場合、どのような現象や体験をその学生にとっての教材にしていくのかを検討しつつ実習をすすめていく必要がある。

母性実習では、周産期を中心に一組の母子を通して正常な経過をたどる対象者に対する援助を学ぶ。そのため、まずは対象を理解し健康課題を明確にすることで必要な看護は何であるか導き出す。太田は、妊娠・分娩・産褥は生理的変化であり病気ではない。ゆえに、本来備わっている力を引き出し、生理的な現象（メカニズム）が順調に経過するためのケアが中心となる³⁾と述べている。学生は母性看護の対象が妊産褥婦と変化を遂げる母親だけでなく胎児・新生児の双方であると学んでいる。また、それら対象は健康レベルが高くセルフケア能力が高いため、直接看護行為よりも確認や見看りが多い。同時に母

性看護では対象の自律を目指した健康教育が中心となることを学んでいる。さらに、川原が述べているように臨床スタッフを身近な看護モデル⁴⁾として認識し対象者との具体的な関わり方を学んでいることも示唆された。

また、母児の命の安全を確保するため、素早い判断と行動が問われることも理解できていた。さらに、母性看護では健やか親子21⁵⁾にある満足なお産となるよう支援していくことも必要であることを学ぶことができていた。

以上より、教員は流動的・偶発的な現象が生起する場である実習⁶⁾において、学生の体験した現象を教材化できる能力を養い、実習を授業の一形態として展開できる実習方法、態度を身につけることが必要である。また、実習指導者および臨床スタッフとの協力体制を強化しつつ、実習の主体は学生であることを念頭において指導にあたることも必要である。

2. 母性実習目標以外の内容

母性実習の目標には、【ウエルネス志向】という表現を使用していない。しかし、多くの学生が母性実習での学びとして、【ウエルネス志向】で対象を捉えるといった母性看護の特徴を挙げていた。

これは、学内において紙上事例を使って看護過程の展開を演習している効果が現れていると考えられる。母性看護において問題解決志向による看護過程を展開すると、進むべき目標が明確であるが故に無理に問題点を作るということになりがちである。実際に学生も他領域で行ってきた問題解決志向から【ウエルネス志向】へと思考を移行することに戸惑っている様子が見られた。しかし、多くの学生は学内での学びを母性実習で様々な体験をすることでさらに深め、【ウエルネス志向】で対象を捉えることができるようになっていた。

大賀は、一般に看護学実習という学習形態には、学内での講義や演習では学び得ない学習が存在すると述べている⁷⁾。母性実習独自の学びとは言い難いが、事前学習の必要性や主体的に学ぶこと、またカンファレンスの意味といった学生としての基本的なことができていない自分自身と向かい合えたことを学びとして表現していることが明らかになった。これらは、各領域実習を通し現在何ができていて、何ができていないのかというように、学生が自らの課題として認識できるよう示唆していくことが必要である。

1990年からの改正カリキュラム⁸⁾より、男女の区別なく母性実習を行うようになった。看護は対象である人間理解から始まり、それは男女両性の理解を意味してい

る。したがって男子学生も女子学生と同様に母性機能を発揮する時期の対象を理解する必要がある。また、夫立ち会い分娩や父親の育児参加が期待される現在、男子学生が母性実習を行う意義は大きい。伊藤ら、荒川は、母性実習において男子学生は様々な不安や戸惑いを感じている^{9) 10)}と述べている。このような不安や戸惑いばかりが高まれば、本来の母性実習の目的や目標を見いだせないまま実習が終了することが懸念される。しかし男子学生は母性実習において自分なりの結婚や出産に対する価値観を深め、看護職者に必要な命を大切に思う気持ちを再認識し、男性だからこそ夫の視点に沿った支援が必要であるなどといった母性実習での学びを見出すことができていた。教員は、男子学生が母性実習に行く意義を見出せるよう関わる必要がある。

以上より、母性看護学における講義と演習さらに実習との関連性を明確にするとともに講義や演習とは違う実習の意義は何かを明確にする必要がある。さらに、学生自身が母性実習を意義あるものにするといった学習意欲の向上ができるよう支援することも重要である。

V. 結 語

本研究では、学生が母性実習での学びとして自由記載した内容と、実習目標との関連性について分析を行った。その結果、学生が母性実習の学びとして自由記載した内容は、母性実習における目標との一致がみられた。さらに、実習目標以外での学びにおいても、母性実習で是非学んで欲しい内容や学生としてのあり方を見つめなおす機会、さらに男子学生が自らの母性実習の意義として見出したものが学びとして表出されていることが示唆された。

謝 辞

本研究にご協力くださいました学生の皆様に深謝いたします。

本研究の一部は、第51回日本母性衛生学学会において発表しました。

文 献

- 1) 森恵美：系統看護学講座母性看護学各論，1，医学書院，東京，2010.
- 2) 衣川さえ子：女子看護学生の母性看護学実習を通じての性役割の認識構造，Quality Nursing，6(6)，505-512，2000.
- 3) 太田 操：ウエルネス看護診断にもとづく母性看護過程，14，医歯薬出版，東京，2005.
- 4) 川原文子：臨地実習における看護学生の失敗経験と学びに関する研究，神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録，33，61-68，2008
- 5) 厚生労働省：健やか親子21，2000.
- 6) 佐藤みつ子，宇佐美千恵子，青木康子：看護教育における授業設計第3版，106，医学書院，東京，2006.
- 7) 大賀明子：特集「看護の専門職性と看護教育」母性看護学実習における看護の専門職性の理解，Quality Nursing，4(3)，31-35，1998.
- 8) 杉森みど里，舟島なをみ：看護教育学第4版，医学書院，東京，2005
- 9) 伊藤千恵，松井幸子，大野絢子，他：男子学生の母性看護学実習における教育的配慮の考察，群馬大学紀要，6，81-89，2008.
- 10) 荒川直子：母性看護学実習において男子学生が経験する性差に関わる困難，日本看護学会論文集：看護教育，38，123-125，2008.